



生徒会長は女生徒達に
逆さ文
ない

箱庭学園生徒会執行部。

それは生徒数約1300人が在籍する超マンモス校である箱庭学園の、それら生徒から選ばれた数人の超精鋭たちの集まりである。

彼らは学園に星の数ほどある部活や、年がら年中行なわれる行事の予定を調整したり、その運営費を割り振ったりする、学園の司令塔である。また学園の規則を作ったりもする、生徒の模範的存在となるべきものでもある。

そのリーダーである生徒会長は、1300人の生徒たちの選挙により選ばれる。

言うなれば、学園の顔ともよべる存在であり、学園の頭脳である。

『生徒会長、黒神めだか』

「私が生徒会長となった暁には、
目安箱を設置し、皆の意見を
聞き取ることを公約する！」

黒神めだかは崇高な公約を掲げ、みこと
生徒会長へ当選した。
彼女は自身の持てる全ての力を、生徒と
学園のために尽くし、彼女のおかげで
学園の様々な問題ごとは解決され、
平和の鐘が鳴り響いたのだ。

「いつだって迷っているし、いつだって怖い
私は正しくなんか無い。
ただ正しくあるうとしていただけだ」



歴代箱庭学園生徒会長で、彼女ほど聡明で、
高潔で、誠実で、崇高な者はいなかっただろう。

見るもの全てを魅了し、羨望され、
しかしそれを鼻にかけておらず、
他人のためなら命をも投げ出す。

彼女はまさに、生徒会長の座に就くべくして
就いた人であった。



1. 「失墜」



「で、どつするの？
かいちよーさん？」

「……」

生徒会長めだかは、視聴覚室で学園の女子グループに
囲まれていた。

きっかけは昨日の夜に届いた一通のメールだった。

『あなたの恋人を拘束している。
手荒なマネをしてほしくなかったら、明日の放課後、
一人で四階視聴覚室に來い。
もし警察にでも連絡したら、恋人の命はない。』

黒神めだかは、恋人(…といっても、明確に交際
しているわけではないのだが)に急いで電話を
かけたが、繋がらなかった。

その代わり、女が電話に出た。
『もしもし～、今あなたの恋人、私たちのもとで
薬を飲まされて眠ってる～。
明日の放課後、ちゃ～んと指定された場所に来るん
だよ？』
『ふざけるな！お前は誰だ！！』

めだかは憤って、目いっぱい叫んだが、電話はすぐに
ガチャリと切られてしまった。

思い当たる節がありすぎる…。

めだかはこれまで、色々な悪党と戦ってきた。
それら全てに、いちいち恨まれることを考えていれば、
正しく生きることなんかできない。

そう思って、生きてきたけど…。

『まさかこんなことになるなんて…！』

「ねえ会長さん。私たち、生半可な
気持ちじゃないの。何てことないくらい
あなたに憎いんだから」
「早くやっちゃった方が、彼のためだと
思うよ?」

めだかは躊躇っていた。
恋人は彼女らの携帯でつながった
テレビ電話を見る限り、拘束されつつも
生きていた。
しかし、もし自分が反抗しようものなら、
即座に殺してしまうという。
そして、彼女らはめだかに対し、そう、
とても屈辱的な要求をしているのだ。

「クス……。ほら早く、スカートをたくしあげて、これまでの自分の悪事を詫びなさい。カメラの向こうの、あなたに酷いことされた人達に向けて心をこめてね」

「な……悪事だと……？
私は悪いことをした覚えなどない……！
「あら？…忘れたとは言わさないわよ？」

「もしかして私のことも忘れてるのかしら？
私はこのあいだまで、お父さまが学園に多額の寄付をしていたことから、
先生方が私に対して特別な扱いをしていたのを
良いことに、教室からひとり、奴隷を作って遊んでいたの。
そこにあなたは現れて、ご丁寧に私の父の脱税を
世間に露呈してくれたわ」

「おかげでお父さまは逮捕は逃れたものの、
会社は倒産。私は地獄を見るよりもっと酷い
仕打ちを受けたわ」
「……そんなのお前の父が悪いんじゃないか……！」

「お父さまは悪いことをしたのかもしれない。でもあなたに私たちの幸せが奪われたのは事実なのよ」
「……そんなこと……!」
「ここに居場所を奪われたのは皆、あなたの理不尽な正義であなたを破滅させるための集いなの!」

「ふふっ、急に態度がおちつかなくなってきたわね。自分の悪事に気がついた?」

「まあでもね、あなたのおかげで
お父さまはさらに賢くなったわ。
また会社を立ち上げて、すぐに一大企業に
なった。
そしてまた今度からこの学園に多額の寄付を
することが決まってるの」

「ふふっ、次の奴隷は誰にしようかな？」

「く……っ……!」
「キャハハハハハッ」

「さ、お話はこれまで。どうするの？自分のこれまでやってきたことを反省して謝る？それとも、あなたの罪の代わりに、恋人に死んでもらうの？」
「……？……!!」
「あ、もちろんお父さまに頼んで、死体隠ぺい処理はプロ集団にやってもらおうから、私たちは何も咎められることはないから」

「ほら、早くやれって言ってるんだよブタ」

「……ッ!!」

「これまでの事をお詫びします……!!
本当に……すいません……でした……!!」

あはは! ついにやった!

生徒会長黒神
めだか、討ち取つたり♪

なんだ、超チヨロイじゃん
こいつ

こんなんがよくウチの学園の
生徒会長なんか勤めてたよね
マジ不愉快!

ほんと!これなら私たちの
方がよっぽどいいよね

あ!ねえ見てコイツ!
ちよつとパンツ濡れてる!

あゝほんとだ!ばっちい

恐くつてお漏らししちゃった?
恐かったでちゆね、よちよち

キ
ャ

キ
ツ

わ
ア

ガ
サ
い
よ
ハ
ハ

701L

701L

701L

701L

701L

「こ...これであいつを解放して
くれるのか...!!?
もう謝ったから許してくれるん
だよな...!!」
「はあ...なに言ってるの?」
「あんたに償ってもらうのはむしろ
これから」
「そんな...!!」
「クス.....」

「あんたはこれから私の奴隷として
死ぬほど可愛がってあげるんだから。
一生クズ女としてしか生きられないように
心も身体も作り変えてやんよ♥」
「.....ッ.....」



こうして黒神めだかは、まんまと女子たちの
罠に嵌まり、命令に従わざるをえなくなった…。

自分が行なってきた「正義」への疑心。

正しいと思っで行なったこれまでの行動が
このような結果を生み、恋人に
危険を及ぼせてしまった。

だが、口では謝ったものの、めだかはまだ諦めては
いなかった。

『(どこかに隙があるはずだ…！)』

見れば女生徒たちは数人。
どこかで拘束されている恋人のところにも
数人がいるのだから。

その場所さえ特定できれば、こっちの女生徒たちを
倒して、彼を助けに行ける…！

『なに考えごとしてんだよ！』

「おらおらおらあ！キャハハ！」
「ぐぼッ…!？」

容赦なく女生徒がめだかを殴ってくる。

—くっ…！本当ならこんなやつら
簡単に倒せるのに…！！

「あははっ！話に聞いたのと違うなあ～！
生徒会長黒神は一夜で暴走族をつぶしたとか
色々聞いたんだけどなあ～。
もし私があの生徒会長黒神を倒したと
なったら、皆どんな反応するのか、なッ！」

ドゴッ！！

「うぼッ…!!」

「キャハハハハ！」

歪な笑い声と共に、女生徒は何度も何度も
こぶしをめだかの腹部へと叩きつける。

oooooooooooo。

どれくらい殴られたただるうか…。

めだかは衝撃に意識を失ってしまっていた。

「ふう～。あー、すこしスツキリした。
ねえねえ、記念撮影しようよ」
「賛成～！」

女生徒の提案に、とりまきの女生徒たちが
応える。

そして、そのうち一人がポケットから
スマートフォンを取り出した。

⚡ オフ

HDRオフ



はい、ポーズ♪

ニ
キ

カ

い

知-モーション

ビデオ

写真

スクエア

パノラマ



「あつはははは！いい絵が撮れたわ！
これでくだらないマネしたら
もつと酷い目見させられるわね。
あの黒神めだかが大股開いて失神
してるところだなんて…フフツツ」

「今に見てなさい。
その澄ました顔を恥辱で歪めて
やるんだから」

2. 「餌付け」

「……く……ここは……？
それに……体が……!？」

目が覚めたら見知らぬ部屋で、
四肢を手錠のようなものでベッドの
四隅に固定されていた。
「たしか……私は……」
女生徒に殴られていたのを覚えている。
「気絶させられて、ここに運び込まれたのか……」

「おはよう豚」

「……!?」
「ああ、豚ってのは今日からあんたの名前ね。あんたは今日から私の飼い豚だから豚って呼ぶことにしたから」
「そんなことはどうでもいい!」
「これはなんだ!?!ここはどこなんだ!?!」
「ここは私の家の地下室よ。完全防音、特定の人しか入れない完全セキユリテイ。まあ要するに、調教部屋ってところかしら」
「……ッ……」

「ここであなたは新しい自分に生まれ変わるの。これまでの皆から羨望される高貴なあなたから、これからは皆から見下げられるゴミクズのような底辺女に」

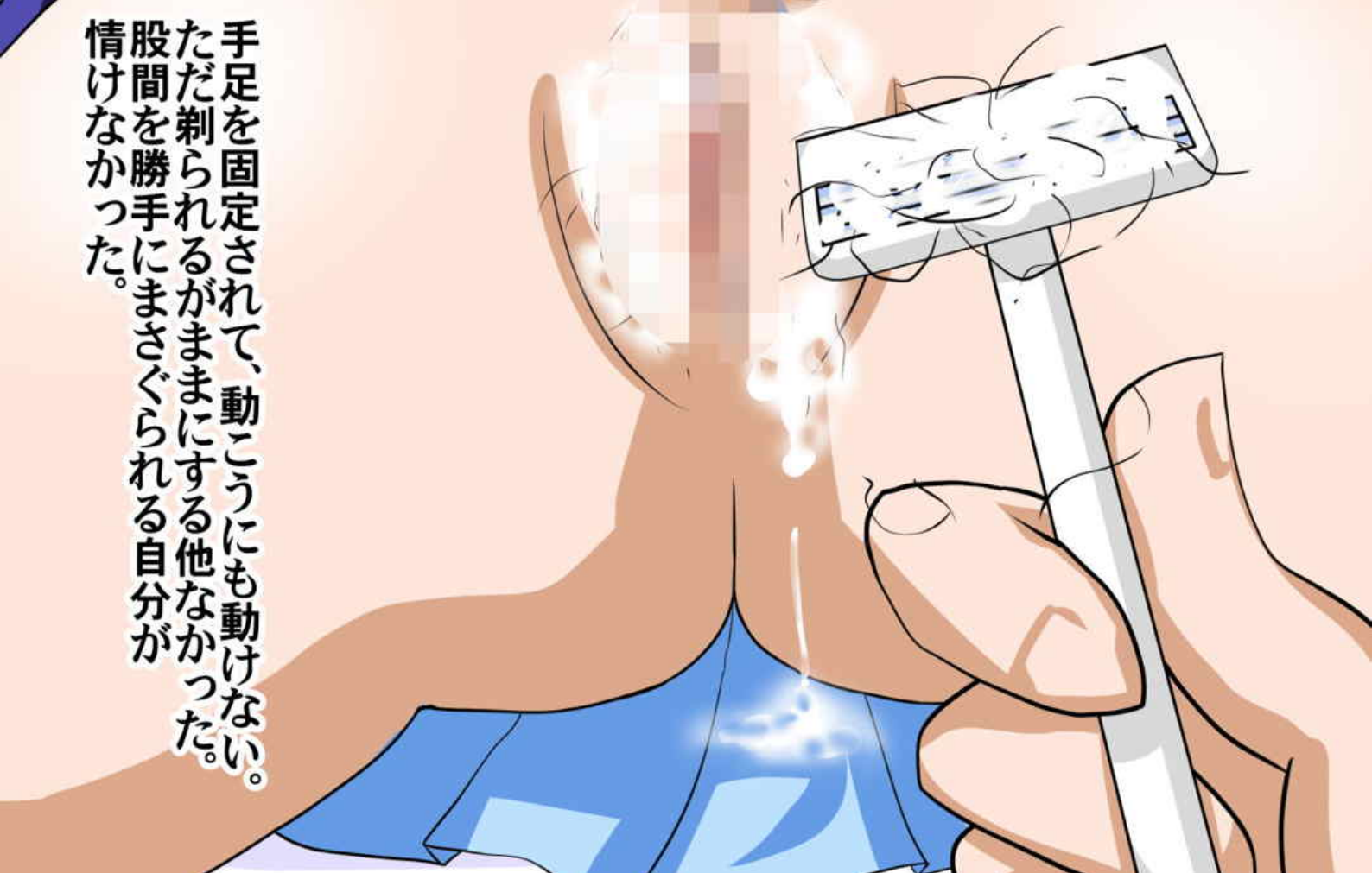
「あなたが注意してた、スカートの丈が短かったり、濃いお化粧してたり、援交したり売春したりする、そんな女達に見下される女にあなたはこれから成り果てるのよ」
「そ…そんなものに私はなりたいはしない…!! 私は何をされようとも、自分の信念を貫くつもりだ!」
「うるせえ豚が喋んな」

カポリ、と口に何かをはめられる。
「おうううううううううううう……ッ!?!」
「ボールギャグよ。これで回数も減るでしょ」

「あと、豚っというくらいだから
これもつけないとね♪」
「んんんんんんッ……!?!」



「アハハっ、しつかり剃れた。
つるつるね。まるでお子様みたい♪」
「く……く……」



手足を固定されて、動こうにも動けない。
ただ剃られるがままにする他なかった。
股間を勝手にまさぐられる自分が
情けなかった。

「どうかしら？もう私に敗けた
という実感が湧いた？」
キツ、と睨みつける。
「ふー……ふー……！」

「まあ今はまだいいわ。
でも段々あなたは私に逆らえなく
なってくる。
それも近い将来ね♥」

「キヤハハハッ！
どう？電マの最強モードで
クリ直撃！
失神しそうなほどの刺激でしょ？」
「んんんっ！！んほおおおおおッ！！」
「おつとどつちちに腰をくねらせたつて
逃がさないんだから！」
「あばおおおおッくくくッ!?」

クリ●リスがはち切れる…ツッ!!
くそ…ツッ!こんなことで私は負けない…ツッ!!
堪えるんだ…!!耐え抜いてみせる…ツッ!!

「ん° ぽおおおおおおおおおツ…!!!」

股間から電撃のように激しく脳を揺さぶる
甘美な刺激で気が狂いそうになる。

電気マッサージ機は信じられないほどの強さで
めだかのクリ○リス周辺を刺激し、
逃げようと腰をくねらせても逃がしてはくれない。

激しく腰をバタつかせて悶えるが、
容赦なくその女生徒はクリト○スを攻め続けできた。

「アハハっ、すごいヨダレ。相当気持ち良いんだね、これ」

自分でも知らず知らずのうちに、
どめどなくヨダレが溢れてくる。

飲み込もうとしても、ボールギャグで口を
開かれていると、うまく飲み込めなかった。

「よ〜し、まだまだやっっちゃうよ〜!
あなたの気が狂っちゃうまで、ね♡」
「んん ん〜!!!」

「うわ…なに洩らしてんの…キショ…」
「ううッ…おえれえッ…!!おええれうええッ!!」
「え?やめてくれ?もう、しようがないなあ…」

「ダメ♡」

「ハンハミィー!!」

「いい？これは罰なの。
これまで正義を建前に生徒会長としての
権力を使って、好き勝手やってきた罰。
あんたはその罪を償わなくちゃいけないの。
ねえ？わかってる？」

「わかってるかって訊いてんの！」

「うおほッ……!!
あいッ……!!ああいまひあ……ッ!!」
「ウフッ、よろしい♪」

それからも女生徒の快樂拷問は
長時間に渡つて行なわれた。

人生で味わったことが無いほどの
強烈な股間への甘美な刺激。

これまで自慰行為などに
かまけていた時間のなかつたためだかにとつて、
これは人生初の性的恍惚であつた。

昇天しても止まることなく電気マッサージ機は
めだかのク○トリスを責め続ける。

イってもイっても、そのまま最強パワーの
電気マッサージがク○トリスを責めてくるのだ。

もう何度イったことか分からない…。

ついにめだかは意識を失ってしまった…。

「ウフ♥
まったたく、汁やらおしっこやら
ヨダレやら、穴という穴から色んな
もの出して...だらしない
生徒会長さんだこと♪」

じゅん

ん...

ん...



3. シャブ



Poon...2...!

めだかが目を覚ますと、そこは
窓ひとつない部屋だった。

めだかは今度は椅子に手足を拘束され、
動けないでいた。

どうやら先ほどと同じく、地下なのだろう。
しかも相当な防音設備が整っているのか、外の物音は
もちろん、部屋の中の音すら、反響せずに、壁へと
飲み込まれていくようだ。

そして目の前にはさきほどと同じく、女生徒がいた。

「あ、おはよう。ちょっと待つてね」

女生徒は、なにやら背中越しに、器具をいじくっているようだった。

「先にきかせる。彼は無事なんだろうな…!?!」

「彼? ああ、あなたの恋人? もちろん無事よ。
あなたが変な行動しない限り、彼には手を出さないわ。
別に彼に恨みなんかはないからね。
フフツ、今頃私の仲間とよろしくやってるかもね♡」

「…!?! そんなわけはない! あいつはそんなことなどしない!」

「オコサマねえかいちよーさんは、
男つてのはオチ○ポでしかモノを考えられない畜生みたいな
ものよ。愛だの恋だの、心のつながりなんか、あいつらには
ないんだから!」

「それはお前の意見だろ…!」

「あー、嫌だ嫌だ、脳内お花畑な女つてほんと。
まあいいわ。そんなあなたのキレイごとも、全部
絶望に墮としてあげる!」

「いねいね♥」

「なつ…それはまさか…!!
やめろ…!!それは所持することも
犯罪なんだぞ!
そんなものをもし使えば…」

「使えば当然犯罪者。
社会から抹殺される。
そんな犯罪者に、あなたはなるの」
「やめ……」

「あ……」



必死になって腕を遠ざけようとしたが、
固定されているため、逃げられなかった。

女生徒は手慣れた手つきで、めだかの肘裏の血管に
針を刺して、液体を注入した。

「うふふ、効果が出るまで、10分くらいかしら？」

「うう……っ……」

普段どれだけ気丈にふるまっているめだかでも、
恐くてしかたなかった。

自分の身体に何が入れたのか……。
そして自分はこれからどうなってしまうのか……。

10分も経たずにめだかの身体を襲ってきたのは、想像とはまったく違った愉快なものだった。

「あは……っ……はああつあああつ……♡」

肉体から精神が解き放たれるような全身を襲う強烈な快感。すぐに思考するができなくなり、かわりに全身全霊が目を醒ましたような異常なほどの爽快感に見舞われた。

「お、効いてきたようね。じゃあしつかり見させてもらいましょか。生徒会長黒神めだかが、覚●剤を打ったらどうなるのか」

「うひ……っ……♡」

「かいちよーさんに、良いものをあげる」

そう言って女生徒が取り出したのは、ピンク色をした性具のバイブレーションだった。

それにこれでもかというほどローションを垂らし、さらにめだかのウエキサへと、一本まるごとぶっかけた。

「ひああああっ♡」

そこに先ほどの電気マッサージ機も持ち出す。

「ようこそ、天国へ♪」



「はああああああああああああんっ！！♡♡♡♡」

頭の中に火花をあげながら炸裂する爽快感に
思考は吹っ飛び、
性的快感を得ることしか考えられなくなった。

「もっとお…！もっと奥…！ああああっ♡」
「ようやく素直になれたじゃないかいちよー」

女生徒の煽りなんて今のめだかには
どうでもいいことだった。

腰がパイプを求めて動いていく。

「もっとっ…！もっと奥のほう…っ！」

「え～じゃあ、かいちよーさんが動いたら～？」

全身が敏感に、かつ甘く刺激を
脳へと直接送り込み、まるで
全身が性器になったような感覚で
正常な思考はもちろんなら、理性により
快楽を抑えることなど、
今のめだかには不可能なことだった。

「ふんっ♡ふんっ♡ふんっ♡
「それ、がんばれ♡♡じゃあもう1センチ
離すから、もつとがんばって腰振ってね♡」
「いやあ……いじわるうう♡」

「それ♡ワッショイ！♡ワッショイ！
ほっ♡ほっ♡ほっ♡うううう♡♡」



「ああううう♡あうう♡あああああああ♡」

「あら、もういつたの？じゃあもう道具は
しまうわね」
「あうっ……！まだっ！まだ足りない！もっど！」
「うふ…素直になつたご褒美にいいわ。
あんたの望み通り、百回でもイカせてやんよ♡」
「あうっ♡早くっ……！早くううう！！」



それから三週間。

地下の椅子に縛り付けられたまま、めだかは女生徒に弄ばれ続けた。

薬を注射されては効果の切れるまで、パイプですっとイカされ続け、効果が弱まると切れ目なくまた注射され、パイプで犯され続ける。

覚醒して眠ることもなく、栄養は点滴により与えられる。

まるで生きたイキ人形のように、ただ淫らな嬌声をあげ続けるだけであつた。

恋人の安否、学校のこと、家族が自分を探しているのではないか…。

本来なら様々な心配事があるはずなのだが、覚●剤はそれらの思考を奪い、欲望だけの声しか聞こえなくさせる。

三週間、めだかはただただ、性欲の虜になり、女生徒が与えてくれるパイプでの快感をねたり、イキ狂う、そんな日々を過ごしていたのだ。



「あ……」

薬の効果が切れたためだかは、酷い倦怠感に襲われ、座っていることすらも困難なほど、疲弊していた。

「薬……また…薬を打ってくれ……
しんどい……このままだと死んでしまう……」

これまで切れ目なく薬を与えられてきたためだかにとつて、薬物の禁断症状ははじめでのことだった。

「だめよう。段々耐性ができてきたのか、薬が効かなくなってきたんだもの。お父さまは大金持ちだけど、覚●剤をいくらでも買えるほどお小遣いはくたさらないのよ？」

「頼む…いじわる言わないでくれ…」

「じゃあこうしましょ。私の命令をきけば、二発打ってあげる。それでどうかしら？」

「……卑怯だぞ…そんなの…」

「嫌ならいいけど？その代わり、もう打ってあげない♪アハッ♪外に逃げ出して、自分で手に入れたら？」

考えあぐねたが、今のめだかには選択肢はひとつしか無かった。

「…要求はなんだ…」

「キャハッ、次期生徒会選挙で生徒たちに私を猛烈推薦なさい。私の財力で有力な生徒はおさえただけ、その他のどうでもいい生徒たちは、私に票を入れることはないでしょう。だけど、皆の火望をうけているあなたが推薦すれば別。どうかしら？」

「…造作もないことだ…」

「交渉成立ね♥」

「あはっ…♥」



4. 「癒着」

久々に学校へと出てきためだかを、皆はひどく心配した。

「なにかあったの…？会長、事件なら私にも相談して…！
私たち、会長の味方だから…！」
「私も！会長、力になる。いや、ならせてよ！」
「皆…ありがとう…」

めだかは目頭から涙がこぼれそうになった。
だがふと見やると、向こうの方からめだかをニヤニヤと、
それでいて冷たい視線を送る女生徒がいた。

「皆…すまないが…私は生徒会業務に戻らなくては…。
三週間も学校を休んでしまったのだからな…」

皆残念そうな顔をしたが、めだかは生徒会長室へと戻った。

「ずいぶん人気なのね～、かいちよーさん」

ノックもせずに入ってきた女生徒は、
部屋のカギを閉めた。

「さっきまでぶっ飛んでたとは思えないわね。
でもあんた、まだ瞳孔開いてるし、どこどなく雰囲気も
キラキラしてるわよ？まるで三週間前とは別人ね♡」

「なあ…それより、薬が切れたらまた打って
くれるんだろうな…!?!」

「…あなたが約束通り、今日の次期生徒会選挙の
候補者演説で私を指名して、猛烈推薦してくれるならね」

「ああ、するとも。そして私はこれで生徒会を脱退する」

「そう…」

めだかはすっかり覚○剤の中毒になっているようだった。

「時間だ、行くぞ」

「待ちなさい。誰がそのまま行けって言った？
私、推薦演説しるとは言ったけど、
普通にしろなんて言っでないわよね？」

「????」

それでは、候補者の二年十三組、
黒神めだかさんです
それでは、黒神さん、お願いします

うおー！
めだかちゃん！

来年も生徒会長
続投してくれー！

期待してるぞー！

愛してるー！！

めだかちゃん！！

まっつました！！

いっしょ！

くーくー

「えへええええつみ、みななあんみ、ツ。
みなあんおま、おまたフエ…いたひっ
ひっ…♡いたましひはっ♡
わわ、わたしひが…くろ、くろかみめだか
でしゅ…うひっ♡ひひ…っ♡」

ザッ…

!!
?

「ええつ...とあのですわねえ...その
今回のひつ...立候補は...その辞退...
辞退させていたただくこととなりました...っ♡」
「ザワ...!?」
「ええつと...わたしには生徒会など荷が重く...
そして...ええつ...わたしはそのような
偉い立場に就くような人間でもないため...
今後は...ふつうに...一般の生徒とおなじように...
生きていこうと思つてます...ひひっ♡」

「ですから...ですから...っ...ひっ...」

あんなにか
いへ
な
ら

やめなさい

ザワ...

ザワ...

ザワ...

ザワ...

スイッチ・オン♡

「ひぎいいいいいいっ…!!?♡

みなっみみみなああさんもっこ

これからもががんばっでああっ♡

がんびぎいいいきいひあっううい

生きて勉強いべんべんきよう

あばがんばっでいきいき…

生きて行っ行ってください♡



「ひとというじはひとがひとをささえ
あつてえええいいいきつてい…ああつ♡
あいきています…！人間はみなああつ♡
だれかとささえああいいい生きて
いきま…ひきいい…だからこま…こまああ
つたことがあつきあ♡あると…っ！だれかに
そうだん…！そうぢやあるいいdじよあいツかに！！」

「あああああああああああつ♡」

い

うら

あ

あ

あ

あ

あ

…以上、黒神めだかさん
でした…皆さま拍手を
お願いします…

なんだ…？
緊張してたのか…？

パチ…

パチ…

様子がなんか…
おかしいというか…
風邪…？

パチ…

えー…なお、次期生徒会長
選挙には、ただいま黒神めだかさんが
辞退したことにより、不戦勝で
消去法により決定しました…
一年四組の…

5. 『会長の椅子』

「会長、来年度のバスケ部の活動費の件ですが、
去年より新入部員が増加しているため、少しばかり
予算を増やしてほしいとのことですが」
「おっけー♡100万くらいかなっ♡」

「会長、新しい制服の規定ですが…」
「なんでもオツケーよ♡そうだ！男子は全員ズボンと
パンツはいちやだめ♡」
「いや…それはちよつと…」
「なに？文句あるの？」
「ひえっ…とんでもありません…！」

「会長、来年度の行事の予定を組んで、先生方に
提出しないと期限が…」
「あーもう！全部中止！来年は行事なし！授業のみ！決定！」
「ひえっ…!?!」
「あんたはもういい！早く出ていきなさい！」
「ひえっ…すいませんでした！」

「あゝ……生徒会長って
気持ちいいわ」

生徒会長





「ねえ？元・生徒会長さん♡」

生徒会長

ハァ...

ハァ...

奇しくも今回の生徒会長選挙では、
女生徒を除いて、すべての候補者が”辞退”した。

もちろん女生徒が裏から手をまわして、
辞退させたのだ。

唯一の対抗馬であった黒神めだかも、候補者演説により
辞退を表明したことによって、
不戦勝で女生徒が当選した。

そして、生徒会長の席から落とされたためめだかは今、
新生徒会長の椅子となっていた。

「あんなだったたらもつとうまく
案件をさばけたんでしようけどねえ？」
女生徒がめだかの背中をさする。

ナニ

生徒会長

ポン♡

「まあ椅子としてのあんたもなかなか
優秀ね。すこし背中がじめつぽくて
気持ち悪いけど」
「…はあ…はあ…」

生徒会長室は、完全に女生徒たちの
たまり場になっていた。

生徒会長の人事により、イエスマン以外は
排除され、学園は完全に、生徒会長の独裁になったのだ。

教師たちも彼女の父親の存在に怯え、回を出せない。

まさにこの学園は、女生徒に乗っ取られたのである。

さらに薬のせいなのだろうか…。

女生徒に生徒会長の座を奪われ、今や自分がその椅子にされてしまっているという屈辱的な状態でも、めだかにはなぜか恍惚と感じられた。

これまで向かうところ敵なしでやってきためだかにとって、弱い立場になって他人に虐げられた経験などなく、屈服することに新しい刺激を感じてしまっていたのだ。

被虐することでなぜか興奮し、股間をキュンと締め付けた…。

めだかの中でマゾスティックな欲求が芽生えてしまったのである。

「はあ…はあ…なあ…そろそろ…
また薬を打ってくれ…」
「そうねえ。その代わりにあなたは
なにをしてくれるのかしら?」
「はあ…はあ…なんでもするツ…!!
早く…なんでもするから…」
「じゃあ豚らしくねだつてもらおう
かしら?」

生徒会長

「薬を打って…くくださいブヒ…」
「もつと豚らしく!」

「ブヒイー!!ブヒっ!!ぶひひひひいッ!!」

「アッハハハハハ!そうそう!
そのくらい吹っ切れなきや!
いいわ!ご褒美にもう一発打ってあげる」

6. 「指令」

放課後、めだかが女生徒たちに連れられてきたのは
旧校舎のひと気の少ない女子トイレだった。

「今日からあんたを学園指定女子便器掃除係に任命する！」
「え…？」

意味がわからず困惑する。

「用はあんたが学校の女子便器を全部掃除しろってこと」

ようやく意味がわかった。

「…じゃあ…掃除用具を…」

「掃除用具は使っちゃだめ」

「！？」

突然女生徒に髪の毛を掴まれる。

「使っているのはあんたの舌だけ！」
「ガボツ…!?!」

とんちんかちん

「なにもしてないあんたに高いお薬出すなんて腹立たしいから、せめて掃除だけでもしなさい。ほら、その便器にこびりついたう●こも全部、ちやくんと舐めとるのよ」
「ガボ…ぼがばあああほ…ガボボ…!!」
「男子便所のはいいから、毎日学校のすべての女子便所の便器を掃除なさい。それがあんたのこれからの役目。わかった？」

グリ
グリ
グリ

「そしたらとりあえず、一発打つかどうか検討してあげる。ただし、すこしでもウ○コがこびり付いてたとかしたら、没収だから」
「ゴボツ…レロ…レロ…レロ…」

夜の体育館へ集まって行なわれたのは
鬼ごっこだった。
「うんんんっ……!!」
「鬼さんこつちよ、手のなる方へ♪」
「あんんんんっ♡」
顔には袋を被せられ、何も見えない。
さらにバイブを装着されて、動くことも
困難な中、全員を捕まえないといけない。

「全員タツチで一発打ってあげる!
あと30分以内にやらないければ、
罰ゲームだからね! キヤハッ」
「ふむううううううううううッ……!!」



皆が授業中、屋上に呼び出されて言われた指示は、校舎への放尿だった。「授業してる皆に向かっておしっこしなさい」戸惑いながらも指示に従った。
ジヨロロロロロロロ...

「元生徒会長が校舎に向かって放尿だなんて、この学校も終わってるわよね」

これまでめだかが守ってきた学校を汚すのは気が引けたが、放尿する開放感がとても爽快に思えた。

「はあ...はあ...」

めだかは自分が確実に変態と化しているのを感じてきた。

7. 「隸屬」

「そんな…そんな…ツ…！ウツだ…！こんなウツだ…！！」
「まきれもなく事実よ。あなたの彼氏は、浮気したわ」

女生徒がめだかに見せた動画は、めだかの恋人が
女生徒の仲間たちとセックスに狂う様子を撮影したもの
だった。

「違う…！これはお前たちが惑わしたからだ！！」
「そうかもね。でも、あなたの彼はそれを受けて、セックスした。
ほら、見てごらんささい。この腰の激しい動き。
彼、あなたをここまで愛したことがある？
それどころか、まだ彼はあなたを一度だって愛したことが
ないんでしょ？」

「……………ツ…」
「アハッ、あなたの彼は、あなたを裏切ったわ。
そしてこれは何か月か前の映像」
「じゃあ…今は…」
「これよ」

次に再生した動画は、彼が女生徒数人とベッドの中に入り、
激しく愛し合う様子だった。

「毎日、朝から晩までずっとこの調子よ。
彼は今やあなたのことなんて微塵も考えてない。
女のヨたちとのセックスのことで頭いっぱいよ」
「そんな…うう…うわああああああ…ツ…！！」

心で繋がっていると信じていた恋人に裏切られて、
めだかは崩れ落ちた。

—もう少しで墮とせそうね…。

声をあげて泣き崩れるめだかを見て、女生徒はほくそ笑む。

本来なら恋人がどういう経緯でことに及んだのかを想像し、傷つくことなどないはずの聡明なめだかだが、覚●剤により脳細胞が侵されたためだかには、事実の前にただパニックを起こすしかなかった。

「だから言ったでしょう？
男なんてチ○ポでしかものを考えられない畜生だって。
今なら私の言ったこと、少しは信じてもらえるかしら？」
「……(ヨクン)」

泣きじゃくりながらめだかは頷いた。

「私だったら、一生あなたを愛してあげるわ」

「…へ…？」

「あなたを一度も愛さないその男と違って、私はあなたを誰よりもたいせつに扱うであげる。一生ね」

「……一生…？」

「もちろん、私の家畜としてだけで♡」

「…っ…」

「朝はまず私のオシッコを飲ませて、
学校まではリードをつけて四つん這いで
歩いて行ってもらおうかしら。
学校ではずっと私のイスをやってもらうわ。
昼は私のウ○チ、食べさせてあげる。
飲み物は便器の水だけね。
夜はあなたが失神して意識を失うまで
あなたの大好きな電マとパイプで
イキ狂わせてあげるわ。
ね？マゾ豚の黒神めだかには最高の幸せでしょ？」

「…そんな…そんなことない…！」

「毎日、これしてあげるのに？」

「あ………」

女生徒が上着のポケットから取り出したのは、
めだかが見慣れた注射器。

この三日間、女生徒がいじわるして打ってくれなくて、
ノドから手が出るほど欲しかった、覚○剤だ。

「ああ…あ…」

「毎日これしてあげるのよ？
ん？どうするの？」

「…う…ああ……あ…っ…」

「どうするかって聞いてんだよ。
ぼさっとしねえでさっさと舐めるよ豚」

「べっろっ……べちやつちゅちゅっ……!!
ちゅるるっ……べちよっ……ちゅっ……!!んはっ……!!
んちゅっ……!!ちゅぱっ!!んっ……!!はあはあ……!!」

「キャハハハハハハハハハハ!決まりね豚!

あんたは今日から私の忠実な奴隷豚。しもの処理も
夜のオナニも、全部あんたを使つてやるよ。
24時間私がトイレ行きたくなったら

いつでも口開けるよ?
でっけえクツ食わせてやつから!

あはははははははははは!!

「ちゅるるっ……!!ちゅぼっ……!!ちゅぱっ……!!♡」

ほらもっと指の間も爪の間も

しっかり舐めろよ!今日このために三日間

ずっと足洗わなかつたんだから

うふふっ、チーズみたいなた垢の塊があるでしょ?

それ食べてお腹壊しなさい

あんたが出したウ○コ、校門前に写真付きで

置いてあげてあげる。キャハハハ!



一心不乱に女生徒の足を舐め
続けるめだか。
もはやその頭の中は薬のことと、
そして自分が奴隷になったという
甘美な敗北感しかなかった。
もう何もかもどうでもよく、ただ
女生徒に忠誠と隷属を誓い、
虐げていただけ。
これまでの自分の、華々しい人生を
捨てて、ただの卑しい奴隷になり下がる。
その敗北感で、全身がキユンと
震えあがるのを感じた。



「んはっ……♥はあはあ……♥
ちゅ……ちゅぱっ……レロレロ……♥」
「いいわ。約束通り、これから一生、
私の奴隷として愛してあげる。ぶぶら♥」

ちゅぱっ……
ちゅぱっ……

ちゅぱっ……
ちゅぱっ……
ちゅぱっ……

8. 「虐割」

身も心も女生徒の奴隷になると誓った
黒神めだかは、24時間、ほぼすべての時間、
女生徒の近くにいた。

もちろんそれは、女生徒の家の中でも。

「夏は冷房きいてないからトイレ行くの
面倒なのよね……おい豚」

「はいっ！」

「絶対こぼすなよ。
こぼしたら全裸で外二週の刑だから」
「ふあい…んっ…♥」
「おいしい?」
「ふあい…おいしいれふ…♥」
「よかった♥」

トイレに行くのをめんどくさがる
女生徒のためにいつもめだかは自分の
口内に女生徒のモノを含んで食する。
不思議と不味くは感じなかった。
めだかは今や、女生徒に心酔し、彼女の
出したものなら、なんでも食べられるように
なったのであった。



めだかは、いつか感じた、敗北による
マゾステイックな恍惚とした快感が、
自分の本性なのだと気がついた。

これまでの人生、何かで他人に負けたことなど
一度もなかったけれど、
本当はこうして誰かに虐げられ、搾取され、
苛められる、
そんな弱い立場になって、自分を物のように
扱ってもらいたかったのだという、
そんな願望があったことに、気がついたのだ。

めだかは、これまで培ってきたものを
全て捨てて、新しい、本当の自分で生きて
いきたいと思った。

かつての恋人も、学校の皆の人望も、勉強も、
将来は総理大臣にもなれると先生から言われた、
その輝かしい未来さえも。

めだかは、この人生を生きていきたいと、
心から思えたのである。

「さーで、それじゃ、学校に
行くわよ豚」

「はいっ♡
今日も一日よろしくお願
いします！
ご主人様♡」



「今日から学校でもリード
繋いだままで、あなたは四つん這いで
歩くの。いいのよね？」

「はらっ♡はらです♡」

「もちろんです…ご主人様…♡」

「はあ…はあ…♡」



今の私は生徒会長でも人間でもない……
ただの豚なのですから……♡

dinning G



その後.....

「だ…誰かがいる…！
この部屋にもう一人…誰かがいる…っ…！」

「誰もいないわよ。テレビが聞こえないから静かに
しなさい」

「誰だ…！私の悪口を言うのはやめる！」

「はあ…こいつももう駄目ね。
早いなあ…」

めだかは薬により脳を破壊され、見えないものが見え、
聞こえない音が聞こえるようになった。

それを治すにはまた薬が必要だが、
耐性ができてしまったためめだかにはもう、薬を打っても
効果が出ない。

効果が出るほどの量を打てば、逆に死んでしまう。

「そろそろ手放すかしら…」

「ニハオ〜！オジヨウサマ〜！
マタデンワクレテウレンシイ！ワタシマツテタ！」

女生徒は車の助手席から降り、人懐っこい笑顔の
外国人と握手を交わす。

「デ？ヨンカイノモノ、ドレ？」

「セバスチャン、持っできなさい」

「はい、お嬢様」

セバスチャンと呼ばれた男は運転席から降りて、
トランクを開ける。

そこには睡眠薬で眠らされ、手足を拘束された
めだかがいた。

「オホッ！コレハジヨウモノ！
ジヨウシヨロヨブヨ！イクラ！？カウヨ！イマスグニ！」

「そうね。通常の100万円でもいいわ」

「アナタホトケ！ハイ、ヒヤクマンエン！」

束になった一万円札百枚を受け取る。

「そいつ強いから、用心なさい」

「ダイジヨウブヨ！ワタシタチプロ！
ヨウイウノアツカイサレテル！」

そう言ってトラックの荷台に眠っているめだかを運び込む。

「オマエタチ！ヤルヨ！」

外国人の呼びかけに、手術服を着た三人が小屋から現れる。
その手にはノコギリが握られていた。

「ジャアネオジヨウサマ！マタデンワチヨウダイ！」

トラックは闇へと走っていった。

「さようなら。かいちよーさん♡」

「さあさあお客サン！佢奔から新しい娘入ったヨ！イッパツどうヨ！」

「いくら？」

「イッパツ20巖だヨ！」

「安い！時間は？」

「20分！次の客が押ししてるから早くイってね！」

「風呂は？」

「そんなの無いヨ！ドア開けたら娘いるだけ！」

「よし、じゃあちよつと抜いていくか」

「まいどあり！
地下三階の17号室ネ！行ってらっしゃい！」

便器女人 No. 184

阴道里面的可以射精

コオオオ...

ガチヤリ...

「おお...これは...
なかなか良さそうじゃないか...」



便器女人 No. 184

陰道里面的可以射精

とある国の片田舎…から車で山道を走ること三時間。

政府の目の届かないその山奥に、性欲を持て余した男たちがやってくるマフィア運営の風俗街があった。

激安の温泉宿と、数百軒と立ち並ぶ風俗店に、街は人でごった返していた。

その中の一軒…。

風俗街の中でももっともリーズナブルですぐに抜くことができることで人気を博す風俗店に、黒神めだかの姿があった。

「ふう…………ふう…………」

手足を切断され、逃げることもできず、視界も奪われ、口枷をはめられていた。

「さっそくはじめようか…」

男は股間からイチモツを取り出し、横のテーブルに備え付けてあったローションを塗りたいくと、めだかの下の口へと前戯もなく挿入した。

「おっ…おっ…！おおおっ…！う“っ…！」

マグロと化してまったく動かないめだかに、躊躇なく男は腰を打ち付け、そして膣内へ射精した。

「ふう…ふう………」

息をしているだけで、抵抗もしない、喋ることもしない、できないめだかに、はたして自我があるのかは定かではない。

だが、ここは、男の精子を受け止めるためだけにある場所…。

ここはそう、性欲処理便所。

便器女人 No. 184

陰道里面射可以射精

めだかには意識があるないに関わらず、今はその便所の中にある
ひとつの便器にすぎなかった...

あースッキリした
宿に戻って一眠りするか

お客さんそろそろ
時間ヨ!

うむ
それじゃ出ると
しよう

終劇。

巻末おまけ漫画

※寝取られ要素が有ります。
苦手な方はご注意ください。

料金後納

Benesee

「こんなはずじゃなかったのに…！」

となる前に、まだ間に合うヒミツの方法があった!!

手紙メール便



勉強を見てほしい？



知ってる人だけ最後のチャンスをする！
キミも最後のチャンスをするな！

458-5858-9

85-454555

〒720-0000
広島県福山市無明町
2563-4
虚弱 棒深層 様

最後のチャンスを手にするには今すぐ

ここをオープン!!



こいつとずっと一緒にいたい！でも別れる時は来てしまったんだ！

へへ…やっぱ俺のオツムじゃ無理だったみたいだ！

気にすんなよ！お前はお前の夢を追って！俺は俺の夢を追うからさ！

…なんか…ごめん…あれ…いけね…目に汗入った…

…待ってる…

…え？

たとえ道が違ってても…どこかでキミとまた会える日をボクは待ってる！

待っていてくれ…必ず迎えに行く…！



俺は新しい夢を胸に抱き、東京へ出ることに決めた

違う夢に向かうけれどいつか必ずひとかどの人間になって迎えに行く…

迎えに行ける自分になつてみせる…！



TOV音楽専門学校

東京で音楽の専門学校を出てさらに三年間…

安いアパートに寝泊まりしながらバイトに明け暮れる日々…

皆はそれなりに結果を出し前に進んでいくのに対し俺は全く鳴かず飛ばすだった…

曲を作り歌を歌いパフォーマンスをしライブに出て歌って歌って歌って…

気がつけばアラサーと呼ばれる年齢になり馬鹿げた夢と先細りの若さに葛藤の日々が続きだした…

Oh Love!! Oh Lyrics is English!! all English!!

そう思っていた時…その手紙は届いた

「結局俺はなにをやってもダメだ…」

なんだっ…そら…ッ…!!

A.S 結婚式は9月に

挙げるけど、キミには

あえて招待状は

出してないから。

だって東京からだと

遠いから大変だろうし、

それに式にはミンクのお

仕事関係の方が

たくさん来るから、悪

つまりだろ、っかい。

今度、あの頃の目を

あつめて参ろう！

じゃあぬり！！

そんな...! そんなバカな...!
いつたいたい何がどうなつて二人が
結婚...?
いつ...? いつから二人はそういう
仲になってたんだ...?

おとし一回帰省
した時に会ったはずだ...
大学に入ってからという
ことはあの時はもう...
とつくに...?
でも、そんな素振りまったく
見せなかった...

いや...確かに恋人同士じゃ
ないんだから言う必要が
あるわけでもないか...いや...
でも...っ...

俺はもう一度ハガキを見る。
あの頃より髪も伸びて女性的で、
可愛らしいリボンみたいなやつを
つけてて、昔の中性的なあいつも
魅力的だったけど...今のほうがより
魅力的にな...
妊娠してる...!?
字で隠れていてよく見えなかったけど、
よく見たらお腹が大きく膨らんでいた。
この膨れ具合...一体何か月くらい
なんだ...!?

そういえば顔もなんとなく
昔より柔和になつたようなく
そう...子供ができたなら女は
変わるって先輩が言ってたな...
あいつ...白鳥なんかの子供を
身ごもってんのかよ...!!
しかも...シンくんって...!!

俺はいてもたっても
いられなくなつて
同級生に電話した
かつての

もしもし？
あれ!? あッッ!
久しぶりい!! 元気い!?
ウチは元気よ!! どしたん?

え? ああうん。
銀色ヶ淵さんと白鳥くんが結婚するん
じやる? 知つとるよ。当たり前じゃん!
なに? あの三人の馴れ初め?
あ、あれは確か大学入つて
すぐのころだったかなあ!!

なんか白鳥くんから
すごいアプローチされるとか
自慢:もとい相談されたりして
当時はものすごい困惑しとつたよあの子。
でもさすがに根負けしたのか
一回デートしたのよ。
それ以来かなあ。あんまり白鳥くんに
関する相談つてなくなつたなあ。

まああの子ちよつと
変わつちよるから、変り者同士
気が合つたんじゃろ。
まあそうは言つても大学では
学部もサークルも違つて全然
絡みなかつたけん、詳しくは
よく分からんわ。
ウチより白鳥くんのツレの
細川くん聞いたほうが早いよ。
じゃあね!



もしもし？ああ、お前か。
久しぶりじゃの。
元気じとるか？俺は元気じゃ。
なんぞ用か？

おー！そうじゃ真二結婚
するそうじゃわ！
驚くなかれ、お相手は我らの
学友……
なんじゃあ、知つとるんか…。

え？二人のことについて聞きたい？
ええぞ。真二から聞いたることなら
全部話しちゃる。
あいつは女のことを逐二俺に
話じできよったんじゃ。
あいつの女性遍歴については俺は
二番詳しい！
いつかあいつの過去の暴露本を出して
大儲けしようかと思つとるんじゃ！
ガハハハ！


あいつと銀色ケ渚さんが
交際しただしてから、あいつは
えらくハシヤいどつたわ。
これまでどんな女も落としてきた
あいつが、念願だった銀色ケ渚さんを
ついに落とせたんじゃけんなあ。

あいつえらい気合い入れて
初回デートに行ったわ。
んで、まああいつの間にかデートを
重ねること数回…。



はじめて銀色ケ瀏さんと
キスしたって日はえらい興奮
しとったなあ。.
なんでもデート帰り、エエ雰囲気
なったらしいわ。

それが大学二年の6月頃の
ことじゃったわ。
お互い新生活がはじまって、
気持ちもなんか開放的だったん
かもじれんぞな。
ワッハッハッ!



六月…？
つまり俺が東京に出て
専門に通いだしてすぐの頃…？
じゃあ俺と別れて二か月後
にはもう…

俺から見よつてもあの
三人はラブラブじゃつたわ。
よりホンマしよつちゆうデート
しよつた。
三人でスケート行ったことが
あつたんじゃけど、あの三人ときたら
ずつと腕組んで滑りよつた。

真冬じゃつたのに
スケートリンクが溶けそうなほど
あつたあつたじゃつたでえ。

スケートが終わつたら
俺一人帰つたんじゃけど、
あの三人はまだ行くところが
あつたらしいわ。
まあこりや後から聞いた
話なんじゃけどもが！！！！



あいつらは三人で
おたのしみだよ!!
くうく!!ホンマに
羨ましいもんじゃ!!

おたのしみ…?

真二はバックが好き
らしくてなあ、しよつちゆう
銀色ヶ淵さんを後ろから
突きまくったって話
聞かされたわ!
気が狂いそうなで!

後ろから…?
そんな…俺とはキスまでしか
してないのに…!?

しっかし二番のすきものは
銀色ケ澁さんだで！
真二を尺しようる時に
銀色ケ澁さんからプロポーズ
したらしいけんな！

ボクをシンくんのお嫁さんにして！

ってな！

そ……

そんな……うそだろ……

そこで白鳥はひとつだけ
条件を出したらいい。
それってのが……



俺は電話を切って家を飛び出した。

結婚式は九月と書いてあったが、今が九月。

でも消印を見ると八月になっている。

どこかでハガキが止まっていたのか…？

なんでもいい…！

今から急げばまだ結婚式に間に合うはずだ…！

こんなの俺は信じない…！

細川は妄想を話しているに違いない！

たとえ本当だとしても、あいつは白鳥に脅されて
いいように操られているに決まってる…！

助けないと…！

俺があいつを助け出さないと！！

故郷の町に着いた！ここで三人は挙式をあげるはず…！

勢いよく結婚式場のロビーに入る。

「お…お客様…!?どうされました…!?!」

白鳥家の式場案内表示が目に入り、急いでそちらに走った。

「ああ…！受付を済ませてください…!!!」

長い廊下を走り抜け、先に教会のような扉が見える。

オルガンの音が聞こえる…。

あそこにいるに違いない…！！

「今来たぞー!!!」

そう叫んで、ドアを足で蹴破った！！

助けにきたんだ！

はあ……？た……
助けにきた……？

白鳥に脅されてるん
だろ？それで結婚
させられたんだよな？

え？おど……なに……？

細川から聞いたんだ
白鳥にバツクで犯された
とか フェラしながら
プロポーズさせられたとか

っ
!?

サウ

し…してない
そんなこと…ッ…

恥ずかしがるな！
助けを求めたことを
恐がらなくていいんだ！
何も恥じゃないんだ！
さあ行こう！
俺は結局なにも成しえてないから
本当はまだ迎えに来るべき人間
ではないのかも…
だけどもお前が苦しんでる時なら
俺もまた恥じやないんだ！
こんな俺でもお前を助けてみせる！
さあかすこ！恥ずかしがらないで！

ひ…っ…

やめなさい君！
一体君は誰なんだ!?

ここの警備はどう
なってるんだ!

変質者だ！早く
追い出せ！

さあ早く！

ツ…!?

ビュッ

きゃあああああ

オッ



おん
ん

ぐあつ…!!

ねえねえキミ…
人様の花嫁になに
してくれてんのかな？

シンくん…っ♡

大丈夫？
かぞこ

うんっ♡



白鳥い……！
お前かすこに何をした……！

はあ？なにをしたって
なに？
普通に付き合って結婚
するだけじゃない

嘘をつけ！かすこがお前
みたいにな下衆野郎のこと
好きになるわけねえ！
お前なんかしたんだろ！
この下衆野郎！

ちよつとそれは
ないんじゃないかな？

かすこ……？

シンくんは立派な
ひとよ
大きな会社をいくつも
経営してるし
人間性もとてもレディ
ファーストなの

それにこの人は自分の
信念を貫いて物事を
何でも成し遂げるわ
あなたとは違うの

ちよつとつまづいた
からって彼女を置いて
東京に逃げるような
あなたとはね

お…おま……

この際だからはっきり
言わせてもらおうけど…

私 もうあなたのことなんて
なんとも思っていないから

出てって
今すぐここから
出てって!!
早く!!

……ツ!!

自分のこと ちゃんと
私って言えるようになった
じゃないか

ふふっ…だってあなたとの
結婚の条件だもの…
私 あなた好みなの女に
少し近づけたかな？

ああ 君は最高の
女性であり恋人であり
これからは妻だよ

…うれしい…!

二人が唇を重ねたところで、
俺の意識は途絶えた。

どうしてこんなことになってしまったの
だろう。。。。。。。

自分の人生への疑念を感じながら、
俺は深い眠りへと堕ちていった。

完

お買いあげましたに

ありがとうございます

ございました。

次回作もぜひ

おつきあい

ください。

2015/4/29

アイニシグ。